

「九州産業大学商学部グループ研究発表会」5年間の歩みと課題

高橋 公忠

I はじめに

本年度で、九州産業大学商学会主催の「九州産業大学商学部グループ研究発表会」は第5回を数え、参加者も33グループ（約180名）にまで増加した。そこで今回、設立当初から、商学会長、学会委員として学生研究発表会の企画・運営に関わってきた立場から5年間の歩みを回顧したい。その成果と課題を示すことで、今後の学生の研究活動の参考となり、商学会の活性化に若干でも寄与できればと願うものである。なお制度の変遷ならびに記録に関わる部分は各年度に商学会評議会等を通じて公表されてきた資料を利用するが、意見および感想に係る部分は筆者の個人的見解であることをお断りする。

II 学生研究発表会の実現

初回の研究発表会は、「第一回 商学部学生研究発表会」の名称で、平成15年12月6日（土）に8ゼミナール13グループ（66人）が参加して行われた。当日のプログラム表紙には、「九州産業大学商学会は、学生諸君が日ごろ、ゼミナール等で勉強してきた成果を発表するステージとして、『商学部学生研究発表会』を企画しました。21世紀を担う学生諸君には、発表会での知的交流

が、新たな研究や学習につながるステップの場となることを期待します。」との企画の趣旨が示されている。

商学会主催で学生研究発表会が企画されるに至った経緯は以下のとおりである。

商学部観光産業学科が平成11年4月に発足したのであるが、平成14年頃には商学科・観光産業学科とも、1年次生の基礎ゼミナール、2年次生から始まる専門ゼミナール体制が実質的に整ったと思われる。ゼミナールの早期化による研究ならびに指導期間の長期化およびフィールドワークの手法を得意とする観光分野の教員が増えたことで、卒業論文の作成を念頭におき、書籍の理解を中心とした個人研究から共同研究の増加へとゼミナールのあり方にも変化が生じた。また同一教員のもとで2年次生から4年次生までの指導が可能となったので、ゼミ生間でのたての人間関係も強化された。このような背景の下で共同研究の成果を発表する機会を持ちたいとの教員・学生からの意見が散見されるにいたった。これを受け、商学会は教員の研究活動とともに、教育活動の充実を積極的に推し進めることとし、新たな学生向けの事業を企画した。そのひとつが、学生のゼミ等での研究成果を発表する場を設けることで、商学部

学生の知的好奇心を刺激する機会を与えるとともに、プレゼンテーション・ディベート技術を向上させ、就職活動にも役立ててもらいたいとの意向で企画されたのが「商学部学生研究発表会」である。なお他の一つは従来から実施してきた研究者による「商学会学術講演会」に加えて、企業家等の方々を講師に迎えての「商学会実務・実践講演会」の開催である。商学部が目指す「産学一如」教育の実現に寄与するとともに学生のニーズに応じることとしたのである。こちらは以前、寄附講座として行われていた企業等の実務家によるオムニバス形式での特別講義の趣旨を生かし続けたいとの意向で企画されたのである。

Ⅲ 学生研究発表会の歩み

1 第一回 商学部学生研究発表会（平成15年12月6日）

初回の研究発表会は13グループ（8ゼミ66名）が参加して実施された。分科会方式をとらず、1号館N101教室のみを会場として行われたために、各グループの持ち時間は質疑時間を含めて20分弱であった。なお参加要件として人数制限を設けなかったために、個人研究2件、2名での発表が2件あった。また2年生のみのグループによる発表がわずか2件だけであった点は近年の傾向と異なっている。

審査員は石原定和教授、西村明教授と橋爪富規子非常勤講師の3名であったが、5

時間以上も審査を続けられながら、的確な講評をいただいたことに改めて感謝申し上げます。

最優秀賞は、「『よかとーく』を利用した求職・求人支援システムの提案」（田村ゼミ：木下慎也、井上陽介、高橋肇、馬渡直人、近藤祥子）、優秀賞は、「シャボン玉石鹸のマーケティング」（平野ゼミ：稲田茂臣、中村寿伸、小山綾子、黒木美枝子、鳥巢良祐）、「東京ディズニーランドの組織文化」（松尾ゼミ：松崎まどか）、「税効果会計の果たす役割」（田中ゼミ：大場健広、竹田勇人、林孝典、松林智恵美）、特別賞は、「サウスウエスト航空の優れたサービスを支える仕組み」（松尾ゼミ：山下良輔）に授与された。

なお初代司会者は観光産業学科3年の岩本匡史、岡本有里子の両氏が務めた。

発表では当日配布したレジュメのほか、パワーポイントをオーバーヘッドプロジェクター風に利用するグループはあっても、現在のような映像としてのパワーポイントを駆使しての発表風景がほとんど見られなかった点、準備不足や経験不足のためか、内容理解の不十分さに加えて、プレゼンテーションが全般に未熟であった点が、今から思えば特徴といえるであろうか。

2 第二回 商学部学生研究発表会（平成16年12月11日）

参加グループ数が16グループ（7ゼミ

74名)と前回よりも若干増加した。前年度は13報告を1会場で連続して実施したために、審査員・聴衆に過大な負担を強いることになったとの反省から、今回は3分科会(各5~6件の発表)に分けて実施することとした。このような分科会方式では全部の発表を見る機会が無くなる点は残念であったが、発表時間15分、質疑時間10分を確保し、さらに休憩・移動時間を10分ずつ設け、発表会全体としてスケジュールに余裕を持たせることも狙いであった。

審査員は、石原定和教授、山本久義教授、太田聡教授、佐藤哲哉助教授、乾弘幸助教授、赤城諭士講師が担当された。審査は、①発表内容、②プレゼンテーション、③パワーポイント・レジュメ等の発表資料、④質疑応答の4審査項目について、各5点の配点で採点され(2人合計40点満点)、全分科会を通して最高点に最優秀賞、各分科会の最高点に優秀賞、特に優れた審査項目があるグループには審査員賞が与えられた。

最優秀賞は、「Salon × Salon システム(SSS)による『美し系サロン』の顧客獲得・関係強化サービス」(田村ゼミ:近藤祥子、鷹島親之、山崎亜紀奈、中島桃子)、優秀賞は、「なぜイマ黒川かーその人気の秘訣」(千ゼミ:芦村真利子、伊藤綾子、鷹巣真里、松窪裕香、三根麻美、門司朝美、荒木悠太、葺本伸幸)、「ECO TOURー屋久島から考えるエコツアー」(高橋ゼミ:照屋辰樹、河添朋子、河野早央里、松本智子、宮本友

紀子)、「どうなる由布院?ー観光地ライフサイクルからの解釈」(千ゼミ:光永彩乃、森山由紀子、坂井咲子、坂本茜、八尋美来、伊藤純平、下村幸太郎)、審査員賞は、「コカ・コーラのマーケティング戦略について」(平野ゼミ:鎌田智裕、萩原健一、檜垣里美、執行理絵、田中綾、夫津木香苗)、「夢の世界ライトアップー都市を光のネバーランドに変えることができるか?!」(高橋ゼミ:佳元宏輔、井手麻莉子、江藤陽子、加藤結香、浦山勇輔)、「近代福岡の経済発展」(山田ゼミ:日隈一嘉、山下真由子、渡邊壽子)に授与された。

なお司会者は教員からの推薦に基づき、佐藤一也、金子和代、本村翔一、今村和美、山上良輔、城後実保の各氏にお願いした。

今回特筆すべきは、九州の他大学および大学院生グループと競い合って、「大学発ベンチャービジネス・プランコンテスト」で2度の表彰を受けてきた田村ゼミグループが2年連続で最優秀賞を獲得したことである。起業を目的とした実践提案型の研究発表であるが、学外でも評価されてきた実績に裏打ちされた研究内容と人を惹きつけるプレゼンテーションは多くの聴衆の支持を受け、以後のプレゼンテーション・モデルのひとつとなった。なお全体的に発表内容にまとまりが出てきた点やパワーポイントの使用が一般的になった点も前年度との違いである。またパワーポイント技術は飛躍的に伸びており、映像の美しさを十分に

堪能させたものや動画や音声まで利用したまさにすばらしい作品とまでいえるものまで出現した点は驚きであった。

この年度から、「商経論叢」の年度最終号に商学会活動報告を掲載することとし、「商学部学生研究発表会」についても、プログラム、審査項目・基準、受賞グループ、審査員講評について詳細な報告がなされるようになった（講評等の詳細については、「商経論叢」第45巻3号（平成17年3月）186頁以下参照）。

3 第三回 商学部グループ研究発表会 （平成17年12月10日）

参加グループ数が22グループ（9ゼミナール109名）に増加したが、前年度と同様に3分科会にした（各7～8件の発表）。

今回から「グループ研究発表会」と名称変更し、3名以上のグループによる共同研究を対象とすることとした。共同でひとつのテーマに挑戦する研究方法は、発表に至る過程でのグループとしてのテーマの決定、問題意識の把握、資料収集等の役割分担、さらに最終発表原稿の作成など、多くの局面で共同作業や議論が必要とされる。個人研究とは異なった困難性とともにより大きな効果が得られるものであるから、商学会はこれらの点を重視して共同研究を対象とすべきとの軌道修正をしたのである。

審査員は、田原榮一教授、内野順雄教授、関根五男教授、佐藤哲哉助教授、牟田正人

助教授、郭智雄講師で、審査項目および基準は前年と同様とした。

最優秀賞は「福岡市の観光におけるユニバーサルデザインとバリアフリーの導入状況と課題」（千ゼミ：西依裕元、森安由佳、張伽淑）、優秀賞は、「次の万国博覧会へーFor The Next World Expo」（高橋ゼミ：池口史典、谷口勝俊、内山圭子、葉山久美）、「香椎祭出店体験から得られた知見」（木村ゼミ：磯村甲志、川島一仁、古野裕幸、田上雄一朗、横山照幸、長崎一綱、中田巖太）、「Space Tourism—さあ行こうよ！宇宙へ！」（乾ゼミ：浦田夕香利、大木美耶、申英愛、徳満加奈枝、中島愛）、審査員賞は、「第3のビールのマーケティング戦略について」（平野ゼミ：方山輝一、鎌田智裕、岡村智明、田中綾、高原裕美）、「チャットで競うプライスダウンオークション」（田村ゼミ：高松康貴、中嶋桃子、緒方薫、吉田奨、中原徹也）、「九州産業大学 昼食事情」（平野ゼミ：塩次由三佳、執行理絵、谷隼一郎、馬酔木敦子）に授与された。また今後の期待度を評価されたグループに対して商学会賞を与えることとし、「北九州市におけるインバウンド旅行の誘致と地域振興」（千ゼミ：芦村真利子、坂井咲子、光永彩乃、山根裕喜、門司朝実）が受賞した。

なお司会は安達健悟、岩井匠、江藤陽子、大庭恵子、松本智子、佳元宏輔の各氏が担当した。

研究発表会も第3回を迎えると、各発表

とも内容やプレゼンテーションおよびレジュメ、パワーポイントに工夫が見られ、レベルも上がっているように思われた。とくに最優秀賞等を輩出された千ゼミナールは、前回に続いてどのグループもしっかりとしたレジュメを作成しており、以後のレジュメモデルのひとつとなっている。また全体としてのレベルアップは研究発表会への参加を意識してゼミに入る学生が増えていることや過去に賞をもらったグループ等の経験や成果がレジュメ等を通じて共有化されてきたことの反映であろう。しかしながら各審査員の講評にもあるとおり、フロアの学生からの積極的な質疑が少ない点は現在にも通じる課題である（講評等の詳細については、「商経論叢」第46巻3号（平成18年3月）160頁以下参照）。

4 第四回 商学部グループ研究発表会 （平成18年12月9日）

研究発表会を設けた趣旨からは参加希望グループ数が年毎に増加することは望ましいことであるのだが、運営への配慮から初めてゼミごとの参加数を1指導教員あたり6グループ以内と制限した。それでも前年を大幅に上回る28グループ（11ゼミナール138名）が参加したため、分科会も5会場（各5～6件の発表に戻した）に増やした。そのほか、いくつかの大きな修正を加えた。一つ目は学生に発表会での司会のほか、企画・準備の段階から実行委員として

関わってもらったことである。過去3回は商学会委員などの教員側が企画・準備作業から当日の運営までのほとんどすべての作業にあたってきたが、発表会の規模が拡大してきたことで、教員のみでは実質的に運営が困難になったことと、学生が主役であるイベントであることから企画等についても学生の意見を可能な限り反映させるとともに、裏方の仕事も経験してもらおうべきであるとの理由からの改革である。学生実行委員については各教員に推薦依頼をし、過去に研究発表会に参加し、発表会を熟知している学生を中心に14名（10名は司会兼務）に就任してもらった。二つ目は審査員の半数を外部審査員としたことである。これは5分科会で必要とされる10人の審査員を商学部教員だけで担当することが困難になったこと、および企業等で活躍している実務家の方々の目で研究発表を評価してもらうことが「産学一如」教育の観点からもまた就職活動を控えた学生にとっても有意義であるとの理由による。三つ目は後述のような表彰制度の変更である。四つ目は全グループがA4版2頁のレジュメを作成し、これを「第4回 商学部グループ研究発表会抄録集」（九州産業大学商学会発行 A4判64頁）として冊子化したことである。これによって発表会当日の便宜を図っただけでなく、後日に至っても記録集として教育に役立てることが狙いであった。五つ目は発表会でのパワーポイント使用を原則とした

ことである。六つ目は発表時間を20分に拡大することで、各研究のレベルが確認できるように時間的に余裕を持たせたことである。最後にAO入試に合格した高校生のスクーリングの一環として研究発表会の聴講を認めたことが挙げられる。

外部審査員は、金子順一氏（ホテルオークラ福岡 前社長）、篠原治二氏（毎日新聞西部本社 元編集局長）、高田和弘氏（ANAセールス九州株式会社 顧客販売部副部長）、二階堂正憲氏（西部ガスリビングメイト株式会社住販 代表取締役社長）、深森芳昭氏（ダイハツ工業株式会社 元副社長）の各氏に引き受けていただき、ペアーを組む商学部教員審査員は、山田秀助教授、平野英一助教授、高木昇助教授、三浦弘次講師、森高正博講師が担当した。審査項目および基準は前年と同様としたが、分科会が増え、審査員の評価基準も分科会ごとに差が出るのが想定されたので、全体の最高得点に与えられてきた最優秀賞を分科会ごとに与えることにし、次点を優秀賞とした。また新たに学生審査員（司会者が兼務）に学生の視点から特別賞を選出してもらうことにした。

最優秀賞は、「今日の戦略的提携の背景—日韓企業における戦略的提携の動向を中心に」（郭ゼミ：篠原崇宏、益田浩瑛、高崎洵子、東郷なつみ）、「新会計基準の導入に見る会計情報の与える影響」（田中ゼミ：伊藤友見、塩出小百合、上滝麻以、塚本武

三、中村将義、野元克洋）、「観光におけるユニバーサルデザインの現状と課題」（千ゼミ：森安由佳、中村想太、金秀珍、金鎮錫）、「地域活性化と観光地づくり—未来への道標」（千ゼミ：宮崎寿美恵、山本育、柳早希、西川亮也、長野友太郎、佐藤匠）、「福岡の都市観光と交通—九州の玄関口から観光拠点へ」（高橋ゼミ：板谷美香、岩下悦子、菊屋令、小濱壮介、下野なつみ、藤岡慶樹）、「優秀賞は、「中小企業の会計—これからの中小企業の会計基準はどうあるべきか」（田中ゼミ：手島亮太、藤井優、藤本淳平、松下みゆき）、「auの快進撃—圧倒的なリーダーに対抗するチャレンジャーの有効な競争戦略とは？」（松尾ゼミ：野田貴久、濱田健太、藤江直人、洲ノ上裕一郎）、「ありのままで一島根にみる地域観光の在り方」（乾ゼミ：古賀美智子、高野恵子、玉木圭一郎、中村秋恵、長坂和也、保田貴志）、「ブランド価値—価格の差からみるブランド価値」（松本ゼミ：古賀健、小崎弘樹、花田洋祐、林達矢、三原良介）、「中古教科書売買支援システム・リブックスの改善について」（田村ゼミ：緒方薫、吉田奨、中原徹也、鶴祐一郎、コーネット サニー）、「特別賞は、「LOHAS—LOHASなツアーへ」（乾ゼミ：北川和明、工藤千奈、小島昭華、タパクリシュナ、羽野麻子）、「携帯電話事業の買収戦略について—ソフトバンクのボーダフォン買収」（後藤ゼミ：坂本貴志、鮫島圭希、後藤亜弓、小浦亜実華）、「ありがと

うSHOP袋—SHOP袋の秘密」(乾ゼミ：内田秀美、河野美幸、マガリ ロドリゲス ヒラカワ、三原慶子、諸岡美和)、「ハウステンボスの挑戦—テーマパークから街へ」(高橋ゼミ：片山裕子、重岡阿貴、澄川真弥、中江啓徳、福留浩平、峯松可奈)、「粉飾事件について—カネボウ・ライブドアの事例に基づいて」(田中ゼミ：今村元気、岩本智道、榎本幸樹、宿里大輔)が受賞した。

なお司会者(実行委員を兼務)には緒方薫、川島一仁、坂井咲子、佐々木孝、田上雄一朗、谷口勝俊、中田巖大、堀山雅充、山根裕喜、松本智子の各氏が就任し、長坂和也、葉山久美、諸岡美和の各氏は実行委員として企画・運営作業で活躍してくれた。

研究内容およびプレゼンテーションは年毎にレベルアップしてきたが、企画・運営段階から学生と教員が裏方として共同作業したことも画期的であり、学会行事の新たな姿として評価できよう。学生の意見も取り上げ、前述の修正が行なわれた。改革の中心は、企画段階からの学生の参加、発表会および各種資料の形式の整備、外部審査員の導入である。企業や実務界での経験豊富な社会人の方々に審査員をお願いしたことで、商学部教員とは異なった視点からの評価、アドバイスをいただき、発表グループ以外の聴衆にも大きなインパクトを与えたといえよう。外部審査員の方々からは社会の学生に対する期待の目が感じられたのであるが、講評については、参加した学生

諸君だけでなく、その後輩諸君や教員諸氏にもぜひとも一読いただければと念願する(講評等の詳細については、「商経論叢」第47巻3号(平成19年3月)162頁以下参照)。

5 第五回 商学部グループ研究発表会 (平成19年12月15日)

研究発表会への参加希望グループが事前調査の段階で昨年度以上に増えてきたことから、不本意ながら1指導教員あたり5グループ以内と各ゼミからの参加数を制限した。それでも昨年度を上回る33グループ(13ゼミナール171名)および韓国忠南大学校学生2グループが参加することになったので、分科会を7会場(各5件の発表)に増やした。

昨年度に引き続き、各教員から推薦された学生実行委員に企画段階から関わってもらい、教員と一緒に議論を重ね、また修正が加えられた。ひとつは新たな知的刺激を受けることを狙いとした研究発表会の国際化である。九州産業大学商学部が交流を続けてきた韓国の忠南大学校および東亜大学校に韓国人学生グループの参加を打診した結果、本年度は忠南大学校の2グループが韓国語(通訳付)での研究発表を行った。なおこれに伴い、忠南大学校からも今回の研究発表会での優秀グループの派遣を要請され、翌3月に2グループを派遣するにいたった。二つ目はこの取り組みを学内外の方々にも知っていただくための広

報活動の強化である。研究発表のレベルが内容およびプレゼンテーションのいずれの面でも向上しており、また昨年度は外部審査員の方々からも一定の評価を受けたことから、九産大生の勉学に対する意欲と能力を示すイベントとして学外にも発信することとしたのである。具体的には昨年を引き続き、「第5回 九州産業大学商学部グループ研究発表会 抄録集」(九州産業大学商学会発行 A4判82頁)としてレジュメ集を刊行したほか、ポスター・パンフレット類等の資料を学外向けに製作するとともに、総務部学外連携課の協力を受け、福岡市東区役所、各公民館および大学周辺の各自治会、さらに九州産業大学公開講座受講生の方々にもそれらの資料を事前に配布して周知を図ることとした。三つ目は、昨年度よりもさらに分科会数が増えたことから、審査をすべて外部審査員にお願いすることにした。過去に研究発表会に参加された教員の方々からの推薦を受け、バランスを取るために、企業等の実務家の方7名と大学等の研究者の方7名にお願いすることができた。

審査員は、井手修身氏(アイデアパートナーズ株式会社 代表取締役社長)、井上修一氏(松山大学経営学部講師)、浮田英彦氏(福岡女学院大学人文学部准教授)、大井尚司氏(財団法人運輸政策研究機構 運輸政策研究所研究員)、小川雄平氏(西南学院大学商学部教授)、金子順一氏(ホテルオーク

ラ福岡 前社長)、木下和久氏(沖縄国際大学産業情報学部講師)、後藤尚久氏(北九州市立大学経済学部准教授)、佐藤浩人氏(立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋マネジメント学部講師)、平松正士氏(学校法人中村産業学園 顧問)、深森芳昭氏(ダイハツ工業株式会社 元副社長)、松村等彰氏(株式会社ジョーキュー 取締役副社長)、見田秀男氏(JALリゾート シーホーク福岡 副総支配人)、武藤康史氏(株式会社スターフライヤー 常務取締役営業本部長)の14名の方々に就任いただいた。表彰については、分科会を7会場に増やし、分科会での発表件数を最大5件に減らしたため、各分科会の最高点に与えられる賞を最優秀賞ではなく優秀賞と変更し、学生審査員が選定する特別賞は昨年と同様とした。

優秀賞には、「外資系ホテルの東京進出」(高橋ゼミ: 別府大幸、酒井明日香、永吉麻里那、原島愛、原田邦彦、東野正佳)、「顧客満足度を高める3つの方法」(木村ゼミ: 待野勝也、桑田勇志、池永和哉、浦中慶徳、山口大将、伊藤亮人)、「由布院・黒川のまちづくり—地域住民からみたブーム」(高橋ゼミ: 澄川真弥、重岡阿貴、中江啓徳、二井内崇)、「急がずに行きませんか…—青春18きっぷでゆとり旅」(乾ゼミ: 石田博之、岡田健、橋爪真喜子、坂東由希子、松岡敬太、宮崎佑哉、福島マリエ)、「グリーンツーリズム—みんなに広めたい」(乾ゼミ: 石田卓也、古川雄大、堀祐貴、石井景子、

蔵原沙知絵)、「LOCAL PUBLIC FINANCE—Breakdown Rankingから見た地方財政」(松本ゼミ：大保一翔、岩下雄紀、辻浩行、柴田欣宏、高野真吾)、「韓国人観光客を増やすために—九州の役割と可能性」(高橋ゼミ：小濱壮介、岩下悦子、菊屋令、山田仁史)、特別賞には、「New Tourism—着地型観光のあり方」(千ゼミ：宮崎寿美恵、田尻沙矢香、山本育)、「女性シニアシユーズ開発—拡大する市場」(平野ゼミ：山本陽司、今林尚子、大磯和広、重松里英、秦祐太郎)、「九州産業大学の学食について—魅力のある学食へ」(乾ゼミ：南嶋仁美、堀田陽子、日高佑樹、内田耕平、洪亮)、「福岡市青果市場移転・統合の問題点」(森高ゼミ：村尾忠弘海、大西哲也、高原洋二郎、柳井理、小嶋徹)、「プロスポーツ球団の経営のありかた—スポーツとお金の関係」(後藤ゼミ：大神拓也、宮崎孝志、宮之脇雅人、平山祐司、吉野耕一郎、江藤淳)、「なぜ若者は三年で会社を辞めるのか!?—インターンシップからの考察」(松笠ゼミ：奥村秀太、実藤彩佳、溝田みなみ、平山真一、田中秀治)、「待ち遠しいよIC乗車券—Suica・TOICA・ICOCAに続け」(乾ゼミ：尾島小百合、高時匡平、永尾彩香、西原良彦、野々下直樹)が、選ばれた。

なお司会者(実行委員兼務)は、小崎弘樹、駒井力也、坂本貴志、佐々木孝、篠原崇宏、杉正道、谷口勝俊、塚本智文、鶴祐一郎、葉山久美、藤本淳平、堀山雅充、三

原良介、宮津良之輔、森安由佳、安松亨の諸氏が担当し、菊屋令、小濱壮介、才藤蔵人、渋谷恭典、中西亮、中村想太、山崎史智、李媛禎、渡邊亮介の諸氏は実行委員として企画・準備作業に関わった。

今回の審査員にも企業人としての視点や他大学の教員としての目線で評価していただいたが、発表会にかける意気込みや発表のレベルの高さに好意的な評価をいただいた反面、プレゼンテーションでは発表内容を聴衆に理解してもらうことが重要であるにもかかわらず、緊張のためか聞いてもらいたいという熱意に欠けているように見える発表もあったとの苦言も呈された。研究の内容もさることながら、熱意と元気が人の心を揺さぶるとのアドバイスはぜひとも活かして欲しいものである。また発表の内容について、問題設定から結論に至る論理的説明に欠け、結論が短絡的ないし情緒的である発表も見受けられたとの批判も当を得ているといえよう(各審査員の書かれた講評の詳細は、本号87頁以下を参照)。なお第3回研究発表会から一貫して香椎祭に出店し、実証的に管理会計の研究を続けてきた木村ゼミナールが優秀賞を受賞したのも、学生の研究活動としては大いに評価されよう。また学外への発信の効果か、社会人の方々を散見することができたのはうれしい限りである。

事前の発表グループ代表者説明会において、著作権法との関係でのテーマパーク等

の写真や企業ロゴ等の使用には十分に注意するようにとの注意がなされた。今までは必ずしもきちんとした手続きをとらなかったグループもあるようだが、研究発表会が学部内のいわば学生仲間内のイベントから学外にも発信される行事へと進化している以上は、社会的ルールを守ることが重要になってくる。グループによっては数十の企業に連絡を取り、企画書等の書類やパワーポイントを提出するなどの著作権処理の手続きを行ったとの話も聞いたが、これらの経験も当該グループにとっては大きな成果といえよう。

IV 結びに代えて—評価と課題

熱意が有る者が集まれば物事は動き出すが、それが継続し、定着するのは難しい。この点では、「商学部グループ研究発表会」も例外ではなかった。参加ゼミナール数および参加グループ数は着実に伸び続け、本年度は13ゼミナール33グループが参加し、実行委員等の裏方も含めると200名以上の学生が関わっている。今更ながらこれは大変なことだと驚かされる。学生の関心が高まり、ゼミ活動の大きな目標とされていることはうれしい限りであるが、企画・運営に関わってきた多くの教員の熱意と教育の一環として学生に参加を呼びかけたゼミ担当教員の支えがなければ、ここまで継続できなかったかもしれない。この点は過去にゼミ連活動が衰退し、「商学部ゼミナール

連合会」が消滅するに至った歴史が物語っている。また九州産業大学学会の役割として学生教育および学生の研究活動への寄与を呼びかけてこられた2代にわたる学長発言も運営に携わる教員にとって支えとなった。

学生にとって研究発表会でのプレゼンテーションに至る道のりは長い。まずテーマ設定から始まり、書籍、雑誌、新聞、インターネット等での資料収集、さらに実地調査活動や面接・電話等でのインタビューを行い、これらから得られた情報を筋書きに従って論理的に結論にまでまとめ上げた上で、パワーポイントやレジメを作成するという作業を行うのである。研究発表会当日まで発表原稿を手直ししているグループも見かける。発表までどれだけの時間を費やし、またその中でどれだけ多くの意見衝突を体験したかは想像に難くない。とても授業時間内だけの作業では足りるわけはなく、秋以降は週に3~4回の自主的な勉強会を実施しているゼミも多いと聞く。図書館や情報基盤センターのグループ研究室やパソコンコーナーさらに学食やロビーの片隅で作業や打ち合わせをしているグループを見かけることも多い。表彰されたグループは大いに褒め称えられるべきであるが、残念ながら受賞にいたらなくても、投げ出したい、逃げ出したいという気持ちを抑えて発表まで行き着いたグループも、この経験が大きな財産となる。また裏方として企画・運営さらに司会を担当された学生、

聴衆として参加した学生も有意義な経験をしたことと思う。

このように「商学部グループ研究発表会」は学生の能力を伸ばし、大きな変化をもたらす可能性があるイベントであることは明らかであり、その存在価値は大きい、まだまだ課題も見受けられる。

たしかに参加した学生の多さには驚くものがあるが、それでも3分の1のゼミナールしか発表グループが出ていないのは残念である。むろん教員および学生の双方とも参加を希望しながら実現できなかった場合もあるし、また個人研究や資格取得の勉強を中心としたゼミナールの参加は難しい。またプレゼンテーションを行わないことを前提とするゼミナールもあるだろう。ゼミナールでの教育方法が多様・多彩であることは学生にとっては選択の幅を広げることもであり、むしろ望ましい姿であるともいえよう。事情はあるにせよ、グループによる共同研究を行っているゼミナールはできれば一度チャレンジしたらいかがであろうか。一生懸命努力した経験で無駄になるものはないと思う。

二つめの課題は、外部の社会人の方々が聴講に訪れているのに、研究発表会に関心を持たない学生も多いこと、せっかくグループとして参加しながらも自分の所属ゼミ以外の発表を聞かない学生も少なからずいること、また2年次生からの専門ゼミナールを控えた商学部1年次生の姿が少な

いことは、さびしい限りである。普段接することのない自分の所属ゼミナール以外の発表を聞くことで新たな発見が生まれることもあろう。知的好奇心こそが現在の学生に求められているのではなかろうか。

三つめの課題は分科会のあり方である。同じ分野の研究を分科会毎に集める方が、聴衆にとっても、審査員の配置という運営面にとっても都合はいい。今までの方式は発表分野の偏りからのいわば苦肉の策であった。しかし発表内容の比較可能性を高め、その分野に精通した審査員を迎えるためにも検討が必要であろう。今のままでは外部審査員の方々の負担も大きいと思われる。

最後に一言。賞がある以上は仕方のないことかもしれないが、勝負意識が強すぎるように思える。発表にまでこぎつけたことを皆で喜び、他のグループの発表から啓発され、最後に聴衆も含めた交流を深める仕組みを今後、構築すべきであろう。参加した喜びを感じて終わりたいものである。

以上、「九州産業大学商学部グループ研究発表会」の5年間の歩みについて私見を交えながら回顧した。たしかに一定の成果を挙げてきた行事として定着しつつあるとはいえ、まだ道半ばの感を否めないのも事実である。今後、少しずつであっても改善を続けながら、学生の成長に寄与し、九州産業大学をアピールできる学会のイベントとして発展してゆくことを祈りたい。